

茶道で感じること

広東外語外貿大学四年（中国）

潘可欣

大学に入ってから、いつもと変わらない高校生活から解放された私は、新しい趣味を探したくなりました。日本語を勉強する学生として、日本文化を身につけておきたいという思いもありました。何度も稽古している後、茶道への理解が深まるにつれて、いつしか茶道は、私にとって心の支えになっていたのかもしれない。

茶道部では茶道の知識をたくさん学び、一番覚えていることは「竹有上下節」の考えです。人はそれぞれ自分の役割があります。すなわち、人には差があります。人によって、成長のスピードが違うのは当然のものです。

しかし、茶道を学ぶまでは、それを受け入れることができませんでした。高校生の頃、もともと数学が苦手でした。なぜ他の人は私より早く数学の公式を覚えたのだろうか。ほかの人が簡単に正解できるのに、なぜ私は正解を導き出すことができなかったのか。数学が人より苦手だと、自暴自

棄になることがよくありました。人生はこれでもう終わりだとしばらく落ち込み、深い絶望感に包まれるほどでした。しかし、進学という大きなプレッシャーの中、夜遅くまで泣きながら勉強しなければなりませんでした。私にとって、高校時代は疑いなく、とても苦しい時期でした。

こうして、人一倍無知な私は、何とか大学に入学することができました。私が稽古を始めた頃は、また他の人より覚えが遅かったです。同級生がスラスラと点前をしていく中、私はまだ途方に暮れてしまいました。抹茶を少しこぼしたり、帛紗をちゃんと捌けなかったりして、これから何をするかすっかり忘れてしまい、お点前を進めないとならないにも関わらず、私の脳はまるで言うことを聞かない壊れた機械のように動かなくなりました。いくら挑んでも、他の人に比べて圧倒的に遅れ、かつて感じた絶望感が再び追ってきて、どうしたらいいのかわからなくなつたのです。茶道部の活動に行く足取りも重くなりました。

ある日、先生が「竹に上下の節があるように、人にも違いがあつて、みんな自分のペースで成長していくものだから、あまり人と比べることにこだわらなくても、自分のペースで成長していけばいい」と説明してくださいました。キャンパスの片隅にある小さな和室で、先生の淡々とした語り口は、私の心に大きな波紋を投げかけていました。

その日、長い間自分を不幸にしていた結び目がようやく

解け、他人と比較することで自分を見失いがちであることに気づいたので。自分の欠点を受け入れ、自分と和解し、稽古するたびに以前の自分より向上できればそれでいいです。

また、茶道を通じて日本文化の繊細さの美しさをより深く感じました。茶道具の正面を異なる柄で区別し、お菓子の形や見せ方で、亭主の気分を伝えます。一つ一つ小さなことかもしれませんが、いずれもゲストへの思いやりが感じられます。

茶道の稽古と茶道の精神に、私の心は動かされ、心の和を見つけました。茶道のおかげで、新たな角度で日本という国を異なる視点で覗くこともできました。これから茶道の稽古を続けながら、中国と日本の共生への道を探ります。そして、こんな大切なことを教えてくれた茶道に、先生に心から感謝します。